

1. 背景と目的

近年、お祭り・イベント（以下、お祭り等）におけるごみ減量活動が活発に行われるようになってきている。小規模な町内単位のお祭りから、大規模な万博やコンサートまで様々なイベントで行なわれており、また取り組み方もさまざまである¹⁾²⁾。

こうしたお祭り等のごみ減量に関する報告はある¹⁾が、一方で、こうした活動の目的のひとつと考えられる「参加者の環境意識を高めること」については、これまで分析評価されてこなかった。またお祭り等のごみ減量活動に関する主催者の意識や行動などについてもこれまで明らかになっていない。

そこで本研究では、お祭り等において行われるごみ減量の取り組みが参加者に与える影響を明らかにすることを目的とする。また取組みの発展や停滞に関わる主催者の意識や行動等についても検討する。

2. 調査の概要

2.1 調査対象

調査対象としたお祭りは、吹田市・茨木市でお祭り等のごみ減量に取り組んでいる「千里リサイクルプラザ研究所 イベントのごみゼロ研究会（以下、ごみゼロ研究会）」が関与したお祭りである。本研究では、そのうち自治会や連合自治会の主催する地域のお祭りを対象とした。行なった調査の概要を表1にまとめた。

表1 調査の概要

	調査日	調査対象	調査方法
ごみ減量活動の実態調査	2004/6/29 ~2004/11/21	イベントごみゼロ研究会の取り組み	お祭りやイベントの事前打ち合わせおよび当日会場の参与観察 ごみゼロ研究会へのヒアリング調査
参加影響に関する調査	2004/12/30郵送 ~2005/1/10締切	茨木市・吹田市各4地域 計1,274世帯	会場周辺地域住民への質問紙調査
主催者に関する調査	2004/11/25	A祭り実行委員長	ヒアリング調査
	2004/12/3	B祭り自治会長	ヒアリング調査

2.2 参加者への影響に関する質問紙調査

本研究では、ごみ減量活動が行われたお祭りへの参加者の意識・行動について調査するため、表1のとおり会場周辺の住民への質問紙調査を行った。

調査対象としたお祭りは、2.1で述べたお祭りのうち茨木市、吹田市内各4つのお祭りである。調査対象者はお祭り会場から半径300m以内に住む世帯とし、そこから各会場約150世帯、計1,274世帯を系統抽出法により抽出した。標本抽出台帳は住宅地図⁵⁾⁶⁾を用いた。

分析は2005年1月10日までに回収した計275通を対象とした。回収結果を

表2 回収結果

	郵送数	回収数	回収率
茨木市	646	151	23.4%
吹田市	628	124	19.7%
合計	1274	275	21.6%

表2に示す。

主な質問内容は参加の有無、環境意識と行動、基本属性で、参加者にはごみ減量活動の印象や環境配慮行動及び行動意欲の参加前と現在の違い等も質問した。

3. 参加者の基本属性及びごみ減量活動に対する印象

第三章はスペースの都合上、ここでは割愛する。

4. お祭り等でのごみ減量活動が参加者に与える影響

4.1 仮説

本研究では、お祭り等のごみ減量活動が参加者に与える影響について、図2のような仮説を立てた。

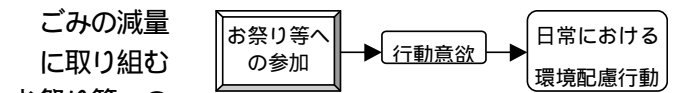


図2. 参加者影響仮説モデル

お祭り等への参加により、環境配慮行動の行動意欲が向上し、日常の行動に反映されると考え、なかでもお祭り会場で体験する行動と類似の日常行動への影響が大きいと考えた。なお、参加から行動意欲への影響の大きさに関する要因についても仮説を立て分析を行なったがスペースの関係でここでは割愛する。

4.2 分析方法

ごみ減量に取り組むお祭り等への参加の影響について検証するために、以下の2種類の分析を行った。

第一の分析は参加以前と現在との違いに関する分析である。お祭りに参加した人に、[参加する以前と現在]とで、表3に挙げた環境配慮行動の行動頻度及び意欲に変化があったかどうかを質問し、その回答の母平均から「以前と変わらない」と言えるかどうかt検定で分析した。

第二の分析は、[お祭り参加者と非参加者]の差の分析である。[お祭り参加者と非参加者]に表3に挙げた環境配慮行動の行動頻度及び意欲を質問・数値化し、両者に統計的な有意差があるかをt検定で調べた。

4.3 参加による環境配慮行動及び意欲への影響

分析結果を表3に示す。[参加以前と現在の変化]については全項目で有意な変化が認められたが、[参加者と非参加者の比較]では、お祭り会場で体験する分別行動と容器の下洗い行動に近い日常行動である「PETリサイクル」、「拭き取り」と、個人行動で日常取り組みやすい「レジ袋」、「再生紙購入」、「詰替え」に有意差が認められた。一方「びんビール」には影響が見られなかった。びんビールを扱う商店の減少という外的制約条件があるためではないかと考えられる。

また仮説では「参加により行動意欲に変化がおきて行

動頻度が変わる」と考えたが、参加の有無による影響の分析結果を見ると“行動意欲”よりも“行動頻度”の方が平均値の差が大きいものが多い。参加による影響が直接“行動頻度”に影響しやすいことを示唆している。

表3 参加による影響分析のT検定結果

	参加以前と現在の変化			参加者と非参加者の比較		
	t検定結果 (4との差)	平均値	N	t検定結果	平均値 の差	N
ペットボトルはリサイクルする 行動頻度(PETリサイクル頻度)	有意差あり	2.49	93	有意差あり	0.36	255
ペットボトルはリサイクルする 行動意欲(PETリサイクル意欲)	有意差あり	2.44	93	有意差小	0.18	249
紙製品は再生紙ものを買う 行動頻度(再生紙頻度)	有意差あり	3.07	94	有意差あり	0.27	257
紙製品は再生紙ものを買う 行動意欲(再生紙意欲)	有意差あり	3.00	94	有意差なし x	0.03	252
詰め替え可のものは詰め替える 行動頻度(詰め替え頻度)	有意差あり	2.76	93	有意差あり	0.31	259
詰め替え可のものは詰め替える 行動意欲(詰め替え意欲)	有意差あり	2.73	93	有意差小	0.2	252
ビールはびんビールで購入する 行動頻度(びんビール頻度)	有意差あり	3.63	80	有意差なし x	-0.40	189
ビールはびんビールで購入する 行動意欲(びんビール意欲)	有意差あり	3.54	81	有意差なし x	-0.26	230
レジ袋をもらわない 行動頻度(レジ袋頻度)	有意差あり	3.19	94	有意差あり	0.49	260
レジ袋をもらわない 行動意欲(レジ袋意欲)	有意差あり	3.04	94	有意差あり	0.34	254
ひどい汚れはふき取ってから洗う 行動頻度(拭き取り頻度)	有意差あり	2.93	94	有意差あり	0.47	258
ひどい汚れはふき取ってから洗う 行動意欲(拭き取り意欲)	有意差あり	2.91	94	有意差あり	0.31	251
家でごみ・環境問題の話を する行動頻度(会話頻度)	有意差あり	3.30	92	有意差なし x	-0.10	245
家でごみ・環境問題の話を する行動意欲(会話意欲)	有意差あり	3.14	92	有意差なし x	0.03	248

***...危険率1%以下 **...危険率5%以下 *...危険率10%以下

5. 取り組みの継続・発展と主催者の意識

5.1 主催者、ごみゼロ研究員へのヒアリング調査

参与観察による実態調査から取り組みの発展や停滞という点から対照的な側面を持っていた2つのお祭りに注目し(A祭り、B祭りとする)その差異の要因について検討するために両主催者、および、ごみゼロ研究員に聞き取り調査を行った。

5.2 2事例の違いと考察

A祭りは、総世帯数約570のマンションの自治体が主催するお祭りで、飲食店が5店舗ほどある。お祭りの意思決定は基本的に自治会長がするが、自治会役員は原則毎年変わる。一方、B祭りは連合自治会の主催で規模も1,000人と大きい。飲食店も24店舗ほどある。B地区の公民館長がお祭りの実行委員長も兼ねる。いずれも3年前にごみゼロ研究員からの呼びかけで取り組み始め、その後、図3、図4のような経緯を辿っている。

A祭りとB祭りを比較してみると、Aでは2年目にリユース食器の返却が面倒くさいという声から参加者から出たり、食器返却率が悪かったりという問題点が出てきたのに対し、Bでは1年目の取り組みでポイ捨て増加という問題が発生した。ともに参加者の意識が原因の問題を抱えることになったが、Aでは問題発生の際の年も取り組みが停滞することなく発展したのに、Bはポイ捨て問題発生時からなかなかごみ箱を撤去できず、分別回

収を徹底することもできていない。

両者の違いの要因としてお祭り規模や自治会内のつながりの強さ、初回の取り組みの成功を考えられる。お祭り規模が小さいほうが参加者は規範的影響を受けやすく、ポイ捨て行動等の問題行動を取りにくいだろう。加えてB祭りでは初年度に十分な広報活動ができなかったという。このような条件があったため、第一回目の取組みでつまづいてしまったと考えられる。そして始めに取り組みに対する否定的な認知が形成されてしまったため、これを覆すのが困難になっているのではないかと。実際、B主催者はごみゼロ研究員が取組み進展に向けて説得しても

「とにかく(ごみゼロ研究員が)実績を残すことで」と言うだけで取りあってくれなかったという。以上のことから第一回目に失敗をしないような配慮、特にそのお祭りの置かれている状況に合わせた対策が重要だと考えられた。

6. 結論

ごみの減量に取り組むお祭り等に参加した人は参加していない人に比べ、日常生活における環境配慮行動をより多くとる結果となった。ごみ減量の取り組みを継続・発展させていくためには、それまでの取り組みを成功させて“実績”を上げ、主催者の動機付けを行うことが重要であると考えられる。

参考文献 1) 矢野潤也「イベント・お祭りより発生するごみの減量に関する基礎的研究」2002 2) 廃棄物学会編集「市民がつくるごみ読本 C & G no. 8」P.36~P.43 3) 石川浩代「リサイクル工作が子どもの環境意識と行動に与える影響」2002 4) 日進町経済環境部環境課「ごみと暮らし(生活環境)についての町民意識調査」1994 5) 吉田地図株式会社「精密住宅地図 吹田市(北部)」「精密住宅地図 吹田市(南部)」2003 6) 株式会社ゼンリン「ゼンリン住宅地図 茨木市」2003 7) 広瀬モデルの引用

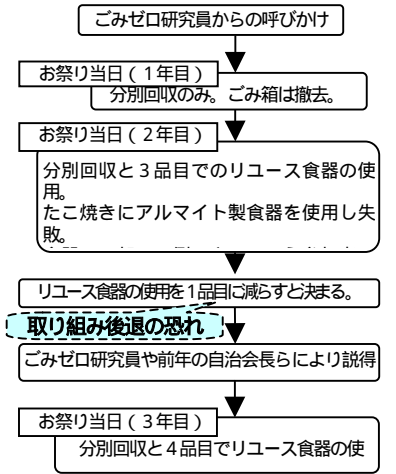


図3 . A 祭りのごみ減量活動の流れ

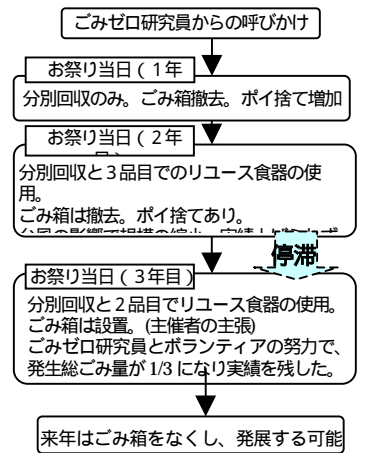


図4 . B 祭りのごみ減量の流れ